

有けり、又もく多くあつまる事かぎりなし、ある者心みにくちなはを一もとめて、その中へなげ入たりけるに、すこしもおそる、事なし、くちなはも又のまん共せず、にげさりにけり、京中の者市をなして見物しけり、ふるくも蝦のた、かひはありけるとかや、

〔百練抄十六後深草〕寶治元年正月十七日辛未、今日關東若宮〇鶴神前、螻蛄數十万充滿、亥子時人々見付之、翌朝失畢之由、後日風聞、

〔類聚名物考 和歌十六〕住吉記者 住吉の忘草の事

紀叔貞〇住吉の浦に行て忘草をたづねければ、美女にあへり、來會を契りてわかれけるに、後の日行けるに、かの女來らず、つれづれとしてある所に、蛙の濱をあゆみ行あとをみれば、歌なり、

住よしの濱の見るめもわすれねばかりにも人にまたとはれけり

〔徒然草上〕綾小路宮のおはします、小坂殿のむねに、いつぞや繩をひかれたりしかば、かのためしおもひ出られ侍りしに、誠や鳥のむれるて、池の蛙をとりければ、御覽じかなしませ給てなんと、人のかたりしこそ、さてはいみじくこそと覺しか、

〔駿府政事録〕慶長十九年十二月六日、今午剋甲山邊路次傍一二間四方草深處、蛙不知幾千万數、噉合戰一時計、諸人見之、寒天之時分、殊奇怪也、

〔結眈錄下〕蛙鬪事

蝌斗

正徳三年二月北野連歌堂ノ前ノ池ニ、蛙數萬聚リテ鬪フ、或人云、是異事ニ非ズ、蛙ノ交ルナリト、

〔和漢三才圖會五十四濕生蟲〕蝌斗 活師 活東 玄魚 懸針 水仙子 加閉流古〇中略

按蝌斗處處池塘多有、如上所說、其如黑繩者既孕カヘリテ爲科斗、尾脫足生爲小蝦蟇、芒種後半寸許、小蝦蟇多出、跳阡陌者、即成長者也、

〔重修本草綱目啓蒙二十八下〕蝦蟇〇中略